

竹之内環濠集落

『奈良盆地には集落の周囲に濠をめぐらしたものが非常に多い。大和は室町時代になると戦国期の動乱による影響を強く受け、自衛手段として防御する方法から、集落の周囲に濠を区画していたものと思われる。そうした環濠も現在では、戦乱の防御から灌漑用に転用されたものが姿を留めている。

天理市では竹之内町のほかに、備前町、南六条町、庵治町の溝幡で環濠の痕跡をよく留めている。一般的に環濠集落は低地部で発達した集落の形態であるが、竹之内町のように標高百メートルの山麓に立地するものは、県下でも数少ない。現在竹之内町では、集落の入り口付近まで残っていた環濠が埋め戻され公園になっており、集落の西側で南北に区画する濠の一部が今でも残っている。』

(天理市教育委員会 - 現地の説明板)

この説明板にあるように奈良盆地の環濠集落は低地部に数多くあるが、環濠集落は侵入者に対する自衛手段だけではなく、自然災害に対しても実に巧妙に作られている。例えば大和郡山の稗田の環濠集落では集落の回りに二重の堤が造られて、河川が氾濫した場合遊水地に溢れた水を導いて、集落を洪水から守っていた。

稗田の環濠集落は、郡山の市街が近いこともあってその周辺に住宅団地が出来た。そして昭和の終りの大雨で近くの佐保川が氾濫し住宅団地が浸水したが、稗田の集落には被害がなかった。住宅団地が造成された場所は稗田の集落の遊水地になっていて、500年前に計画された通り、住宅団地に洪水を導いたのである。

室町期、南北朝の騒乱が治まると大和では興福寺の一国支配が進む中、有力武士たちの領主化が進み、徒党を組んで「私合戦」を繰返すようになった。筒井氏、古市、箸尾氏、越智、十市、櫛原氏などがそれで、なかでも筒井氏と越智氏が力をつけ、「大和永享の乱」では国衆が両陣営に別れ十余年に渡って抗争を展開した。奈良の環濠集落の多くが回りに濠を巡らしたのはそのような時代である。

時が移り筒井氏も越智氏も歴史の彼方に消えたとき、環濠だけが生き残って大和の田園風景を造ってきた。

この竹之内集落の環濠もまた、青垣山の風景の中に溶け込んでいるようで、山の辺の道の一部として、生き続けているのである。

